

うちなあ 点描 第百十六回

歴史的建造物の復元・修理事例 (三)

「喜名番所」(観光案内所)

文・平良啓 Hiromu Taira

読

谷村喜名にある「喜名番所」は国道五八号と村道の間に位置し、観光案内・交流・休憩施設として、読谷村を訪れる観光客や地元の人々に利用されている。

琉球王府時代の番所はその地域の行政を担っており、現在の役所に当たる。首里城から喜名番所に向かう

「中頭方西海道」、さらここから国頭までの各番所をつなぐ「国頭方西海道」の起点として、喜名番所は物や文化が交流する拠点となっていた。一八五三年、ペリー提督の調査隊が立ち寄り、その時に同行した画家のハイネが描いた絵が残されている。一八八一年(明治十四)には上杉県令

(現在の県知事)が県内巡回視察の折、喜名番所に宿泊している。

番所はもととも座喜味城内にあり、その後喜名区に移設されたといわれているが創建年代などはっきりしていない。廃藩置県以降は間切役場、読谷山村役場として使われていた。門の前には老松がそびえ、建物の周りには樹木が茂っていたが、去る沖繩戦と戦後の混乱で建物は消失してしまった。さらに海洋博の折に国道の建設工事があり、敷地内の東側半分を国道が通ることになった。その工事に先立つ発掘調査では瓦が大量に出土し、井戸の跡なども確認されている。

「世界遺産周辺整備事業」により、喜名番所と西側の村道の整備が計画された。調査・設計が行われ、平成十六年六月に工事が着工されて平成十七年一月に完成を見た。木造平屋建てで再現されたのである。設計では、まず古写真や文献・資料、発掘調査記録を収集・分析し、当時を知る古老への聞き取り調査が行われ、有識者による委員会が開催された。平面は、往時の間取りを想定して座敷とその周りを囲む縁側、雨端を一部再現している。そして、展示



案内・休憩コーナーを設け、そこに読谷村や喜名区を紹介する写真や地図などのパネル、情報を発信する端末機を備えている。

柱や梁などの主な部材は九州産のイヌマキを使い、継手・仕口も伝統的な工法を採用して沖繩の木造伝統技術の継承を図っている。興味深いのは、発掘されたほとんどの瓦が灰色瓦であったことである。沖繩では十八世紀以降徐々に赤瓦が使われて、今日の屋根景観を形成している。それ以前は灰色瓦が屋根に葺かれていた。そこで、この灰色にこだわり特殊な焼成方法で再現されている。いつも赤瓦屋根を見慣れている私たちにっては新鮮な印象を受ける。タイルや衛生器

具、ガラスサインは読谷の職人によって製作され、地元の色を生かした建築素材を使用している。現在、観光案内人が常駐し、読谷村の歴史や文化、施設などを紹介している。

建物周りには樹木が茂り、花壇には花が咲いている。前面の村道は緑陰並木道として整備され、南側には駐車場と芝生広場が国によって整備されて人々に利用されている。沖繩県内に多くの番所があったが、本格的に木造で再現されたのはこの喜名番所が初めてである。各地にあった番所を可能な限り復元・再現し、歴史・文化のネットワークが形成されたら素晴らしいと思う。

